

イエスの「証人」

(ヨハネ一・一九～三四)

「良心に従って、真実を述べ、何事も隠さず、偽りを述べないことを誓います」これは「法廷もの」でおなじみの証人の宣誓文である。だが聞くところによるとこの宣誓文、各地の裁判所で微妙に異なっているのだそうだ。冒頭のもは東京・大阪バージョンだが、名古屋地裁では「良心に従ってほんとうのことを申し上げます。知っていることをかくしたり、ないことを申しあげたりなど決していたしません。以上(右)のとおり誓います」という具合に俄然口語調に。なるほど意味は同じなのだが少々締まらない感じがするのは私だけではあるまい。

閑話休題。今朝の個所は洗礼者ヨハネが自らについて、いやそれ以上にイエスについて証言をしている個所である。以下洗礼者ヨハネのイエス証言について三つのことを見てみたい。

一、後から来るも初めから居たお方

このエピソードをイエスの生涯の何処に置くかということには少々の困難が

伴うが、三四節の記述から考えると、恐らく洗礼者ヨハネがイエスにバプテスマを授けて程なくのことと思われる。エルサレムから一日路のヨルダン川向こうのベタニヤ(エレサレム近郊のベタニヤとは異なる)に洗礼者ヨハネを訪ねた者たちに対し、ヨハネは自らを「露払い」の位置に置き、イエスを「後に来る人」と言った。しかし、ヨハネの証言はそれに留まらない。というのも彼はイエスのことを「私より先におられた」とも証言しているからである。ヨハネやイエスが生きていた時代においては「長幼の序」は絶対的であった。だからイエスがヨハネの後に来るとなれば、イエスのヨハネに対する優越を見ることは難しくなる。そこでヨハネは先に福音書記者が記述したとおり(一五節)、イエスが世のならぬ先から存在していた方であるという証言をしたのである。

二、世の罪を取り除く神の小羊

エルサレムからの一行がヨハネのもとを訪ねた翌日、ヨハネは自分の方に来るイエスを見るなり「世の罪を取り除く神の小羊」と言った。「人類最高の教師」でも「愛と奉仕の模範」でも、はたまた「人類に革命的变化をもたらすカリスマ」でもない。洗礼者は何よりも「世の罪を取り除く神の小羊」としてイエスを見たのだ。この証

言にはイエスの犠牲(十字架の死)による罪の贖いが明確に描かれている。注目すべきはイエスが取り除く「罪」が単数形であるということ。つまりここでの力点は何々人の犯した個別の罪の行いにあるのではない。イエスは苦難のしもべとして、また過越における小羊のように自らのいのちを捧げることにより、この世の罪深い状態、即ち罪の大元を根こそぎにして、救いを与えて下さるのであり、実にこれがその洗礼者ヨハネの主張にして福音書記者の伝えたいイエスの姿なのだ。

三、聖霊の授与者

自身がイエスにバプテスマを授けた時(参：マルコ一・九、一〇)、ヨハネはイエスの上に御霊が下り、更に留まったことを証言した。彼はまたイエスが聖霊によってバプテスマを授けるお方であることをも示している(三三節)。もつともここでの力点は救われた後に与えられる様々なカリスマにはない。むしろ全てイエスを信じる者が最初に体験する「救い」と深く関連していると理解すべきである。旧約の神の民イスラエルの歴史を通して解ったこと、それは罪を前にした人間の無能ぶりである。人間の罪は深く、どんなに人間の力で悔い改めても神のみ教えに完全に従い、神の喜ぶことを行うことは不可能なのだ。し

かし、いやだからこそ、神はキリストを通して信じる者たちに聖霊を与え、その聖霊の力により、主のみ教えにかなうものにして下さるのである。(参・エゼキエル三六・二五、二六)かの日み子の上に下って来た聖霊の臨在を見、その声を聴いたヨハネはそれを大胆に証言したのである。

* * *

「良心に従って、真実を述べ、何事も隠さず、偽りを述べないことを誓います」という宣誓をし、供述の義務をもっているとはいえ、裁判においては証言を拒絶することが認められる場合がある。その一つがその証言によって本人が刑事訴追を受けたり、名誉が棄損される場合だ。しかしヨハネはどうだったろうか。彼は不利益を恐れずにイエスについて証言し、ヘロデ・アンティパスの不正を正した。結果は非業の死。彼だけではない。キリスト教の歴史においてイエスについて証言する者の中には殉教の死を遂げるものが少なくなかった。そしていつしか「証人」を意味するギリシャ語には「殉教者」という意味が加わるようになった。しかしキリストの証人は不死身である。彼らは師と仰ぐ主と同じく「死んでも生きる」存在になったのだ。友よ、私たちも証人として生きよう。いのちはそこにあるのだから。